

衝重

同
一同斷六寸八分
四方

同斷壹枚ニ付貳拾文之處、○中略

右引下ゲ直段、銘々見勢先江張出し置候様申達仕度候、

寅八月廿六日

諸色之内木具類掛牛込馬場下横町

名主 小兵衛人○略外一

〔下學集下財〕衝重ツイカサ子〔名目抄雜物〕衝重ツイガサ子
上 下用之

〔大上臍御名之事〕女房ことば

一つるがさねは、そうみやうなり、くぎやう、四はうはつねの人はもちろんす、げんしやうを四方にあけたるをいふ也。

〔貞丈雑記膳部〕一三方四方の下にあけたる穴を、今ハくりかたと云、古ハげん玄やうと云、げん玄やうをあくると云事、上臍名之記に見へたり、げん玄やうとハ眼像と書いて、眼ハ目也、目とハあなたの事也、目の像といふ事也、引目、猪の目などと云目の字も、皆穴の事にて同意也。

〔玉函叢說三〕衝重の考

中比より人をあへする器の中に、衝重てふ物あり、衝の字はつくといへるがよみ也、されどついついといへるをいへり、衝立障子てふ字假用ひたるなるべし、ついといへる詞こととまうけて、とみにしついづちにもとみに立ん料に、まいでつれば、さる名をばつけたるに、元は何くれの物の蓋を打復して、身の上に居たれば、衝重とはいひにけんかし、五節所にて姫君の衝重には掛外居を用ひ、女房のには長櫃を用ゐけるなどいへるも、さこそはありけめ、五節所の姫君、女房等衝重の事は、雜末に、當日中略次女房衝重用長櫃、姫君料掛外居用之、凡自余目同前と見へたり、長櫃の衝重は、されど打まかせては足なき折櫃を用ゐける也、古き賭射の繪の、射手の饗まうけたる所に、衝立のあ